



心の豊かさ

先日、ピティナで審査員や指導法研究委員をお務め下さっていた石川文字先生が亡くなった。ピティナとして、大切な人材を亡くしたことに深い悲しみを感じている。石川先生がいらっしゃる審査員控室には笑いが絶えなかった。明るいお人柄なので、恵まれた環境にいらしたのかと思えば、ご主人が長年ご病気で大変なご苦労があったと伺った。石川先生との最初の思い出といえば、自主的な講座を開催するために東音ホールをお貸しした時のことである。100人くらいの方々が集まる盛大なものだったが、終了後、受付に集まった入場料6万円を石川先生にお渡ししようとする、全額ご寄付下さるとおっしゃったのである。そのお気持ちには、暖かい「心」を頂いたような気がした。

その後10年以上の年月が経ち、福田靖子賞選考会を開催することを報じたところ、公募していなかったにもかかわらず、多くの方々からご寄付を頂いた。今回参加した9人が皆、素晴らしい演奏をしたことに感無量であったことはいうまでもないが、主催者としては、皆さまからのご寄付のお陰で、本賞以外にも準賞・奨励賞・ベストレッスン賞を出す事ができ、より多くの優秀な若者たちの未来を応援する事ができたことを嬉しく思った。こうした金銭面のサポートはもとより、様々な方向からご支援を頂いたことに心より感謝申し上げたい。ピティナで確実に「心の豊かさ」が増ってきていることを実感したのである。石川先生のような方が審査員として全国を回ることによって、「心の豊かさ」が伝播していったのだと思う。

「経済的な豊かさ」があれば、他人に何か奉仕しようとする「心の豊かさ」を持ちやすいかもしれないが、それを追求するが故に「心の豊かさ」をどこかへ置き忘れてしまうこともある。また、「経済的な豊かさ」のみを追求した結果、「豊かな情熱」を失うこともあるかもしれない。「豊かな心」は、一朝一夕に育まれるものではないだろう。数多くの心豊かな会員によって積み重ねられた、ピティナの歴史の重みを感じたのである。

指揮者のレナード・バーンスタイン氏は、亡くなる前に「自分に残されたエネルギーは、教育に使いたい。」と語ったそうである。それまでの人生で蓄えた知識や経験に感謝し、次世代の若い人たちとシェアしたいと考えたのだろう。教育者たるや、自分なりに何かを追い求めて活動し、自分を支えてくれた全てのものに感謝し、そこで培ったことを他の人に伝えていきたいと思う「心の豊かさ」こそが、重要な基盤になるのだと思う。

素 感 直 論